

● 経歴 ●

宮城県女川町 町民生活課

丹野 宏美 さん

年齢: 31歳

出身地: 宮城県

平成24年

青年海外協力隊としてモンゴルへ派遣

平成27年

復興庁市町村応援職員として女川町に駐在

平成30年

女川町任期付職員として勤務(予定)

※復興庁スキーム → 市町村任期付職員(予定)

復興後役に立つ経験を積みたいとの想いから青年海外協力隊の長期派遣へ参加。 帰国後、協力隊での経験を活かして被災地に貢献したいと考え、復興庁市町村応援職員へ応募。

私は東日本大震災で被災しました。震災後すぐはハード面の復旧・復興が中心で、私ができることは何もないのではないかと思います。そうであれば、復興後役に立つような経験を積み、皆とは違った側面から物事を見られるようになりたいと思い、震災翌年に長期派遣でモンゴルに行きました。「なぜこの時期に海外に行くのか」という人もいるかもしれないけれど、私は違うところで長所を伸ばし、短所を埋めて、日本を客観的に見られるようになりたい。また、当時、日本のみならず世界各国から応援・支援をいただいたので、世界の人たちに、「被災したけれど、こうして恩返しできるようになった、それぐらい日本は強いんだ」ということを伝える代表になる、という気持ちで協力隊に参加しました。

帰国後は、協力隊の経験を生かして、被災地に貢献したいという気持ちがありました。たまたま現地の企画調整員から復興庁応援職員の情報をもらい、応募したところ、女川町が要望されていることが、私のこれまでの経験にまさに合った内容で声を掛けてもらいました。

協力隊での経験を活かし、町民のコミュニティ形成を支援する業務で活躍。

現在は、被災された方々が高台移転などで新たに生活する地域においてコミュニティの形成を支援する仕事をしています。女川町では、高台移転によって新しい地区をつくるに当たり、その地区に住むことになる方々を集めて、交流会を開いています。集会所の設計について話し合い、完成した集会所でイベントをするなどして、住民の間で自然と会話が生まれるようなきっかけづくりをしています。

最初は「コミュニティ形成」という言葉のあいまいさに悩みました。手探りで取り組む中で、「とにかく女川町の人に会わないといけない」と思い、町民の方が集まる場になるべく足を運び、話をしました。海外だと言葉が通じませんが、女川は自分の育った町にも近く、方言もほぼ同じなので、すぐに打ち解けることができました。

Q&A

Q1. 海外での活動のご経験が豊富ですが、青年海外協力隊ではどのような活動をされたのですか？

中学2年生の時に初めて青年海外協力隊に参加したいと思い、以来、協力隊に参加したい一心で、日本語教師の資格を取得できる大学に入学し、資格を取得しました。

協力隊にはこれまで3回参加しました。1回目は、ブータンへの短期派遣で、小学生のバレーボールのウィンターキャンプのサポートなどを行いました。2回目も短期派遣でニジェールへ行き、子供たちへのバレーボール指導等を行いました。ずっと長期派遣に行きたいと思っており、3回目の派遣でモンゴルへ長期派遣され、小中学生へのバレーボール指導や、幼稚園での日本文化の紹介等の活動をしました。

Q2. 今のお仕事のやりがいは何ですか？

町民生活課は、コミュニティ形成支援のほかにも、多くの業務を所管しています。私自身も幅広い業務に携わる中で、いろいろな方と関係を築くことができました。そのつながりがさらに別の仕事につながることも多く、とてもやりがいを感じます。

これから被災地で働く方へメッセージ

多くの方が、「被災地は復興に近づいており、自分が力を発揮するところはないだろう」と思っているかもしれませんが、しかし、時間が経過する中で、被災地ではハード面以外の課題が出てきています。特にコミュニティ形成等の支援は、人と人とのつながりが生きる仕事なので、協力隊OBが力を発揮できる分野ではないかと思います。被災地の復興に、自分の経験や知識を生かしたいという気持ちがあれば、ぜひ力を発揮しに来てほしいと思います。